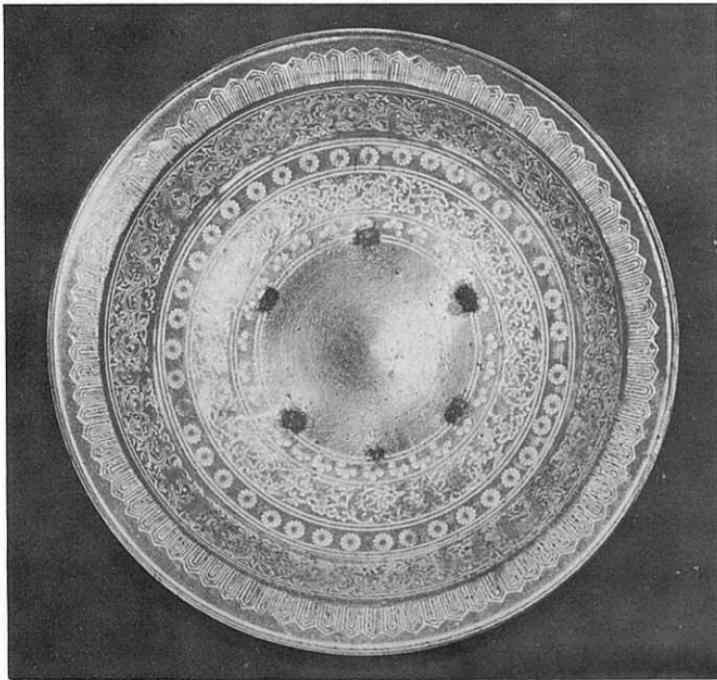


No.23

博物館報



象嵌文鉢（庭木窯）径37.5cm

江戸時代の慶長末年前後、肥前の武雄領内に、南部庭木窯が開窯され、象嵌文の陶器が焼成されているが、この鉢の象嵌技法は、特に技術的に安定していることから寛永年間の製作と思われる。

特に形状も整い、印刻花文も鮮やかである。この様式の陶器は、完器としての伝世品が非常に少なく、又武雄北部系の小畠古窯、大谷古窯（国指定史跡）や川古窯、焼古窯との技術の交流や関連性を学ぶためにも貴重な資料といえよう。

目次		
・象嵌文鉢（庭木窯）	――――――	1
・常設「佐賀の歴史と文化展」紹介	――――――	2、3
・ヨーロッパにおける肥前磁器	――――――	4、5
・日本近代洋画の流れ	――――――	6
・近代洋画史における百石・久米・岡田の芸術	――――――	7
・日誌・行事	――――――	8

展覧会紹介

常設 佐賀県の歴史と文化展

- 主 催 佐賀県立博物館
- 会 場 佐賀県立博物館
- 会 期 昭和49年12月7日～昭和50年3月31日（9時から16時30分まで）
- 休館日 毎週月曜日および国民の祝日の翌日 12月28日～1月4日
- 観覧料 大人50円（30円）、大高生30円（20円）、中小学生20円（10円）（ ）内は団体料金
※成人の日は無料

自然史（1号展示室）

県内の自然史資料を展示する1号展示室はタイラノザウルスの生態模型を中心に、県内の岩石標本、その背景には地球の歴史である古生代・中生代の古地理図や、ナボレオン石と俗称される球状閃緑岩の解説と岩石分類のパネルをならべる。古生物を説明する化石標本のコーナーは古生代から中生代の当館が所蔵するシダ類、魚類の化石をはじめ、県内から出土した化石類などである。

その他エビメアヤメは模型と標本で示すが今回はヒシのいろいろのケースでは「ヒシ実とり」写真パネルを中心トウビシ、オニビシ、ヒシの標本を展示する。

この常設展を中心となる展示は「佐賀の鳥」であって、有明海のシラサギ、オサギなどのサギ類をはじめ、ガシカモ類約10種を展示する。そして有明海干がたに生活するムツゴロウ、ワラスボなどの生態を紹介する展示了した。



川口のシラサギ

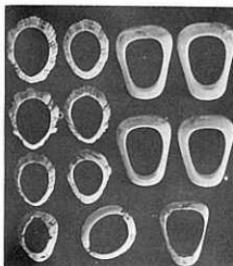
考古（2号展示室）

大陸の進んだ多くの文化をいち早く受けついだ佐賀県は、古代より大陸文化の門戸として栄え、数多くの遺跡・遺物を残している。

当館では、これらの資料を一括して保管しており、その出土品については全国的に注目されている。今回の中でも各時代の代表的な資料を選択し、郷土佐賀県の原始・古代の生活史の一環がうかがえるよう、時代の流れに沿って展覧を試みた。

先土器時代の資料は、鬼の鼻山に産する安山岩と、腰岳に産する黒曜石によって製作された、各種石器に代表される。縄文時代は、始源期の土器の一群として注目される、盛人岩洞穴遺跡出土の櫛目文土器と、それに伴なって出土する石槍や、「原始時代の古記録」である白蛇山岩陰遺跡の各層出土の土器、石器がある。さらに、一部朝鮮半島に分布圏をもつ曾畠系土器や、食糧貯蔵穴跡として例が少ない坂の下遺跡出土の各種資料等がある。

弥生時代は、稻作農耕の資料である土生遺跡出土の炭化米・各種木器や、甕棺・石棺から出土する各種装飾品と、末座國の存在を推定できる、桜馬場遺跡出土品（国指定重要文化財）等を、時代の流れに沿って展覧した。



大友遺跡出土貝釧

県内における古墳文化は4世紀末から7世紀まで継続するが、この時代の遺物を「畿内勢力の支配」・「武具と馬具」・「原始絵画」・「農民の生活具」・「豪華具」の部門に分けて紹介し、この時代の文化を概観できるようにした。

なかでも「原始絵画」は王塚の馬の図・田代太田古墳壁画・竹原古墳朱雀の模写図を中心に線刻壁画を展示しているが、これらの資料は当館が公開する古墳文化資料の中で異彩を放っている。

歴史（3号展示室）

近世史の上で、肥前での大きな出来ごとに、文禄慶長の役にかかる名護屋城の築城（1592年）、島原の乱（1637年）、フェートン号事件（1808年）があげられる。このたびの展示には、これらの事件を中心と佐賀藩との関連資料を展覧した。なかでも鍋島直正を中心とした鍋島・久松・鍋島連合の一連の絵図は、佐賀藩の幕末の事情を知る好調の資料で、これらはいずれも軍事史家秀島成忠氏の著証による絵図である。

また「江戸期の甲冑・武具」のコーナーを設けた。これには、「肥前國忠吉」の槍、「宮田勝貞」の肥前鎧、「肥前守橋本新兵衛忠長作」の火縄銃、「肥前唐津住国友文五郎好之作」の火薬銃など資料性の高いものや、墨具足・火事装束・大筒など資料として興味あるものがある。

美術（3号展示室）

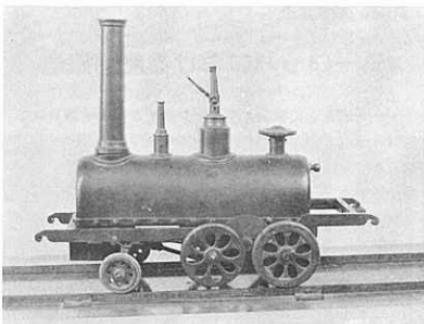
本県は明治初期以来、百武兼行、久米桂一郎、岡田三郎助をはじめ多くのすぐれた洋画家を輩出した。

今回は、とくに大正から昭和初期に活躍した洋画家にスポットをあて、個々の作家の両業をしのぶとともに、この期の美術界の動向をもあらためて回顧しようと意図した。

出品物としては文展、帝展で活躍した山口亮一、北島浅一、御厨純一、武藤辰平と、孤高の画家三根霞雲を加え、それぞれの代表作数点づつを展覧している。



「鳥と子供」 山口亮一 1922年 (162.1×112.1)



わが国最初の蒸気車牽型 安政2年 (1855)

工芸（中展示室）

肥前の陶磁は、古唐津系と、古伊万里系に大別され、古唐津は、室町末期に開窯期を迎え、東西松浦地方をはじめ、武雄地域にわたって、その陶技は幅広く伝承され、それぞれの個性ある地域性の中で発達し、茶陶、民陶へと展開した。

また、磁器は約360年前に創業期を迎え、染付磁器、色絵磁器は、有田郷を中心に発達し、伊万里様式、柿右衛門様式、色鍋島様式を生み、国内外に交易された。

このような近世日本の窯芸の中核をなす肥前陶磁を現代の時点において、歴史的な意義をなすと共に、改めて、その造形美術上の価値を鑑賞しようとするものです。

展示は、企画性をもち、年4回程度内容を変え、まず第一の企画として古唐津系を中心に、全般的な肥前陶磁の流れを展示しております。



武雄唐津系 (小山路窯) 桃山時代末期
柳絵深向付

第16回 研究講座

ヨーロッパにおける肥前磁器

——主として東ドイツ ドレスデン美術館調査について——

県文化財専門委員 永竹 威



D・D・R 国立ドレスデン美術館正面

肥前陶磁器が北欧・西欧地域で取引されたのは十七世紀のなかば1653年（承応2年）である、主として長崎出島を積出し港としたオランダ連合東印度会社の貿易事業によるものである。記録では、1653年にバタビアの薬種商の注文による茶碗2,200個の肥前染付磁器であるが、それ以前にも中国磁器の代替品として肥前磁器が輸出されたことも当然考えられる。フランスの日本美術史展目録（1878、1900）によれば日本磁器が最初に輸出されたのは、1646年（正保3年）とあるので染付磁器が小量ながら、長崎出島から積出されたのは、この時点よりはじまつたというよう。

また彩絵磁器の輸出は、1659年（万治3年）であったと記録されており、その内容は、サンブル・オーダーによる「彩絵花文カップ」で赤絵と緑色の配色花文様の50個であったようである。

このようにジャワのバタビアを中心としたオランダ連合東印度会社（V・O・I・C）の肥前磁器の交易は十七世紀のなかばより開始され、最も利益をあげた時期は、1663年（寛文3年）から1672年（寛文12年）である。量的に実績を記録しているのは、1653年から、1682年の間に190,000個以上の輸出量である。

しかし、1730年以降になると、中国の窯業が復活し（享保14年、雍正7年）オランダ連合東印度会社は広東で直接中国磁器を購入したようで、この頃から脇荷貿易に

移行し、肥前磁器の交易は退潮した。

オランダ連合東印度会社の肥前磁器交易の品種は、前期（本荷物貿易）においては、主としてガリボット（薬種瓶）・チーポット・チーカップ類（洋風茶器）であり、彩絵の装飾用置物・人形類が1665年（寛文5年）前後であり大鉢大皿類や大壺（沈香壺）類は、後期（本荷としての交易期）の1690年前後であると思われる。

意匠模様の傾向としては、前期は、中国明朝の染付磁器・彩絵磁器の模倣・模写であり、中国磁器の代替品としての表現様式であった。その時期が推移して、日本の絵模様と構図が「柿右エ門様式」描かれて交易されたのは、1684年（貞享元年）前後である。1700年前後にすると、きわめて東洋的な趣向である香炉・燭台・鳥籠類。異形の蓋物や加工品の他に純洋風な食器類に東洋風な花鳥図・花文様・唐草・唐花纹様などが描かれる趣向が西欧の伝世品によって学ぶことが出来る。

今回の調査は、このような交易内容の変遷を裏付ける資料を西ヨーロッパの博物館・美術館の展示品・列品より選択し分類的な考察を試みることであった。

特に、東ドイツ（ドイツ民主共和国）の旧ツウインガム殿であったドレスデン美術博物館・陶磁館の収蔵品（チャイナーキャビネット）が、昭和50年3月開催の福岡大博覧会場の特設館に移動展示・巡回展示されるための準備であり、選択調査が主であったことはいうまでも

ない。

ドイツ民主共和国・国立ドレスデン美術博物館は旧ツインガー宮殿であって、歴史館・絵画館・陶磁館などから構成されている。陶磁館は中国陶磁（主として明・清時代）と日本磁器（肥前磁器系）の他に十八世紀から現代にわたるマイセン窯の製品を常設展示してある。

常設展示の内容は、壁面を利用した30センチ内外、20センチ内外の色絵皿を額皿風に展示し床面には、沈香壺（蓋付）が5点程度展示してあるに過ぎない。また、ガラス四面ケースには、中型の壺類・蓋物・細口瓶・茶器類が展示してある。殊更に例品の解説はない。

しかし、十七世紀末から十八世紀前期に収集品の肥前磁器のキャビネットの内容をはじめ、階下のスター・デイルームの肥前磁器類は、ヨーロッパにおける宮殿などのポースレン・キャビネットの中で、量的にも質的にも最

高の内容だと格付されている。またこのキャビネットには、中国明清時代とドイツ・マイセン窯の十八世紀の磁器類が收藏されている。一説には、このキャビネットの収蔵品は延べ1,300点内外ともいわれている。

ドレスデン宮殿の肥前磁器は、アウガストス・ストロング二世の在位期間の1715年（正徳5年）から1733年（享保18年）前後に収蔵されたともいわれている。特に1717年には、王はドレスデンで収集の陶磁器を収納するための「日本宮」を建築した。現在、1721年の陶磁器の登録台帳があるが、その内容は、日本磁器 660である。アウガストス二世王は1733年死去しているのが、その後は収集されていない。その後の後継王は、磁器の収集に興味を示していないようであって、アウガストス二世死去後1741年に日本館に梱包のまま格納された。その後130年を経過した1876年に公開されたと伝えられている。

（昭和49年8月24日当館中展示室での講演内容の要約）

（文責 当館）



古伊万里 染錦花籠手輪花鉢



柿右エ門 傘を持つ婦人図三方割蓋物

日本近代洋画の流れ

九州芸術工科大学教授

岸田 勉氏



講演会風景

今日は日本近代洋画の流れ、とくに今回の展覧にかかわりのある明治期を中心概観してみたい。

近代洋画の源泉は、すでに近世初期の十六世紀に求めることができる。つまりキリスト教布教にもともない、油絵や版画がもたらされており、また安土や島原の宣教師の修学院（セミナリオ）では、油彩画や銅版画の製作を行っていたのである。しかし江戸のキリスト教禁令により一時洋風表現も中断され、かわって江戸中期吉宗将軍の時、出島の蘭館や長崎奉行を通じて、中国絵画等とともにヨーロッパの絵画や書籍が入手され、平賀源内、雁歌堂田善、司馬江漢らが、近代科学研究と並行して洋画法を研究したが、著しい発展を見ずに幕末へ至る。

洋画の研究が本格的になるのは、幕末の川上冬崖、下岡蓮杖らに始まる。冬崖は幕府の蕃所調査、開成所画学局を通じ、洋画の研究と指導に尽力し、高橋由一らの子弟を育て、慶応三年のパリ万博には画学院の学生数名が幕府から油絵を出品するまでになっている。

一方ではショイヤー夫人やワーグマンら民間の在日外国人の他、明治政府が用い陸軍士官学校で地図の作成などにたずさわったゲリナー、大蔵省造幣局で銅版、石版の技術を指導したキヨソーネ、さらに明治九年に開設された工部省美術学校の教師、フォンタネージ、ラグーザ、カベレッティらの指導により、科学技術に結びついた洋風表現という形で、近代洋画は明治初期に急激な発展をとげた。

しかし、明治十五年頃から従来の急激な欧米文化の移入に対する反発として、フェノロサ、岡倉天心を中心とした日本美術を高揚する国粹主義運動が起り、一時洋画界は不運をかこった。そのような中で、明治二年には、洋画界が大団結し明治美術会を結成、画題等においては国粹主義の影響を受けながらも洋画界の新展望

を待った。

ついで明治二六年には黒田清輝、久米桂一郎が結成し、フランス外光派の画風を伝え、従来のイタリア画派風の暗褐色を主調とした洋画壇に新風をもたらし、再び洋画界は活気を取り戻すのである。さらに明治二九年には東京美術学校に洋画科が設けられ、黒田一派は白馬会や美術学校を通して次第に画壇の主流を占め、いわゆる日本のアカデミズムを形成していく。一方、旧来の明治美術会系の画家たちは、明治三五年太平洋画会を結成、溝谷国四郎らが属し、浅井忠らは三九年関西美術学院を創立、各々独自の画風を進めた。

また明治四十年には第一回文展が開催され洋画界は一層隆盛を迎えたが、同時に明治末以来、白権派などを通じて後期印象派の作家たちが盛んに紹介され、官房の作家達の他に多様な画風が大正期にかけて展開された。つまり大正期には文展、帝展の他に在野の二科会、あるいは春陽会などが洋画团体の主なものとなり、大正末期にはフォーピズム、キュビズム等も取りあげられ、昭和初期にまで強い影響を及ぼした。

さて以上の様に近代洋画を概観してみると、ヨーロッパ絵画の追随あるいは模倣といった性格がわが国の洋画史においては強く感じられる。とくにヨーロッパの近代絵画が、伝統的な芸術の革命の上に成立していることからすると、日本の近代洋画史上このような革命は見当らない。強いて言えば川上冬崖や下岡蓮杖等、幕末から明治初期の洋画家達にのみ、日本画から洋画への移行という意味で革命的な性格を見る事ができる。

ここで近代洋画史における近代という意味が大きな問題となってくるのである。

（昭和49年10月5日当館大展示室での講演内容の要約）

（文責 当館）

近代洋画史における百武・久米・岡田芸術の位置

東京国立文化財研究所 隅里鉄郎



講演会風景

明治初期の洋画家の中では、九州出身者の活躍がひときわ目をひく。百武兼行、黒田清輝、久米桂一郎、藤島武二、岡田三郎助、青木繁、さらになると児島善三郎、古賀春江などがいる。また明治政府で実権を握っていた薩長土肥という観点からすれば、薩摩からは黒田、藤島長州からは日本画の狩野芳崖、高島北海、土佐の国沢新九郎、肥前の百武、久米、岡田という風に維新を推進した西南雄藩から、近代美術の先駆者達が出現しているということも興味深い。なかでも、潤沢と百武が洋画家としては最も早くから活躍を始めた人である。

さて、これら明治初期に活躍した美術家は必ずしも最初から画家になろうとしていた人達ばかりではない。つまり薩長土肥出身者のように政権に近い人達は勢い政治、経済などに結びつきがちであり、例えば黒田は法律を勉強するために渡仏途中で画家になっており、高島北海も林業を学ぶためフランスの専門学校へ行き、帰國後官吏となつた。百武の場合も旧藩主に同行し外国に滞在して外交官として活躍、帰國後も官職についている。この三人の場合をみても、いづれもあるきっかけで画家になってしまったわけである。これが明治初期の主に洋画家の典型である。つまり明治の洋画家達が、社会に実際に役立つ産業、経済等の仕事に向いながら、それらと異なる芸術、文化に向っていったところに明治期のある面での新鮮な面がみられる。はじめてヨーロッパの文化、芸術に接した時に、それを学ぼうとした清新な感覚は、我々の想像以上のものと思われる。例えば、百武の作品を見る場合、決して技術的には高度でないが、非常に真剣な熱気をはらんだ、一種のプレミティビズムみたいな

ものが感じられる。彼らは実際の仕事と、本当に自分がやりたいものとのせめぎ合いの中で、自分の意志を貫こうとしていたようと思われる。

そのような明治初期の背景を見た上で、中期、末期、大正とつなげてみると、今回の展覧に関しては、百武が明治初期に位置し、久米が中期であり、岡田は明治末から大正・昭和初期へと続く。

そこで、百武、久米、岡田が近代洋画史上果した役割、あるいはその位置ということになると、端的に百武は最初期の先駆者の人であり、久米はアカデミズムの基礎づくりをした人、岡田はその確立者としてとらえることができる。ただ今回展覧された作品を見ていると、これまでの岡田の確固とした評価に加えて、百武・久米の果した役割に対して従来以上の評価がなされなければならないようと思える。例えば百武の場合の風景画や西洋風俗画などは当時の国内の画家たち以上の正確な画技を示しており、また久米にしても黒田以上に外光派あるいは印象派に対する理解が深かったことを示す作品が見受けられる。

以下、スライドを通して、百武、久米、岡田の作品と、彼らの周辺にいた作家たちのものを比較しながら、主に人物像、裸婦像、風俗画、さらには風景画といった区分で、近代洋画の展望と、その中の三人の独自性といったものを具体的に追っていきたい。

(以下スライド解説)

(昭和49年10月5日当館大展示室での講演内容の要約)
(文責 当館)

博物館日誌

9月 1日	シアトル博物館東洋美術部長ヘンリー・トルプナー氏来館	館庭氏ほか多数来館
9月 4日	NHK佐賀放送局より「物売りの声」テープ2巻寄贈を受ける。	9月 23日 兵庫町青年団「ふくさ会」28名茶室利用
9月 7日	「東光会展」開場式 池田知事、石本秀雄氏ほか多数来館	9月 25日 移動博物館打合せ会(応接室)
9月 10日	芙蓉中学校から「天体星座」円板の寄託を受ける。	10月 5日 「百武・久米・岡田三人展」特別講演会 「日本近代洋画の流れ」
9月 14日	「理科作品佐賀市支部展」開場、大展示室(9月18日まで)	九州芸術工科大学教授 岸田勉氏 「近代洋画史における百武・久米・岡田芸術の位置」
9月 15日	東ドイツ・ドレスデン美術館ハンスロスト氏、来年度「古伊万里さとがえり展」開催の会場下見のため来館	東京国立文化財研究所 陰里鉄郎氏
9月 16日	「東光会展」終了 (総観覧者数5,741名)	10月 13日 日展理事古賀忠雄氏ほか5名来館
9月 20日	「理科作品佐賀県展」開場、大・中展示室(9月25日まで)	10月 17日 太良町移動博物館開催(20日まで)
9月 21日	「百武・久米・岡田三人展」開場式、森副知事、瀬戸口教育長、神奈川県立美術	10月 19日 博物館協議会開催(応接室) 西日本婦人文化サークル佐賀教室30名茶室利用
		10月 21日 河北倫明氏「三人展」観覧のため来館
		10月 23日 基山町移動博物館開催(25日まで)
		10月 23日 「百武・久米・岡田三人展」終了(総観覧者数13,625名)

●行事お知らせ

修学旅行の計画に博物館の見学を折込んでください。

常 設 展			
佐賀県の歴史と文化展	12月7日～3月31日	1・2・3号展示室	月曜休館

企 画 展			
展覧会名	会期	会場	備考
松方コレクション展	11月16日～12月1日	1・2・3号・大・中展示室	会期中無休
佐大特設美術科総合展	12月10日～12月15日	大展示室	“
佐賀県高等学校美術展	12月18日～12月22日	大展示室	“
新遺跡資料展	50年1月25日～2月23日	大展示室	常設展と併設・月曜休館
肥前名刀展	3月2日～3月23日	大展示室	会期中無休

●新刊書案内

百武・久米・岡田三人展図録——先般、開催した「百武・久米・岡田三人展」の際に発行したもので、三人の作品150点余りを収めた図録を作成いたしました。学校教材用として、また、郷土出身画家の学術的資料としてご参考になると存じます。形態 B5版 アート紙 152頁
額布価格 1,300円 申込みは当館に

博物館報 第23号	
発行年月日	昭和50年1月1日
編集大	國 弘
発行	佐賀市城内一丁目15-23 佐賀県立博物館
印刷	合資会社 音成印刷所